片歌並前歌附

伊地知文庫
文庫20
52

行歌
并発句附

文庫20
52

文化三年寅六月於相府

送別の分ち

袖みなる風も親しき扇かな

小田濱ゆく風待のおつる大濱まで

御社に詣て

涼しさや日ころ子神の新社

同し社詣して武江ゟ来客

ゆうひて

まん福と頼む扇の風かな

いつもし延貝ゝ柳介孫太

是非

適問や聴く柳の下納涼

[illegible]酒に酔ひし[illegible]
御世とは知らぬ山の泉に[illegible]
古[illegible] [illegible]くしく
志[illegible]なく[illegible] 水の[illegible]迄
六月九九日住吉大明神へ詣て夕涼
して
御幣の随風ふる松の[illegible]
七月朔日 船路にて
秋風の波を流る 御船哉
越後信濃の国まて[illegible]
雨[illegible] 神鳴[illegible]
鳴神の遠ざかりゆく里 秋の雨
雨[illegible]へ[illegible]

帰る雲松原近し 嶺の月
京都正[illegible]寺乃紅葉見にいきさ
[illegible]つゝ 皆青葉なりして
[illegible]の秋[illegible]
それなれて
萩咲や 奥は紅葉の通ひ路
中秋十五夜
[illegible]し 鶯や入る[illegible]草の月
[illegible] 晴るゝや 月の[illegible] 門
九月十三日宵の[illegible]雨[illegible]
[illegible]
[illegible]させし[illegible]の月

九月廿日 [illegible]句評

人心乃なとあるらん

停車とる穀ハ知のふ雲

立船ふハ忘れ虫ゐる哉

いろ今のむかし昔ならぬ

しかつまし候へ共

汐時をまちる小船待候節

急所

松一本涼みやいあはれ紅葉

秋

風そよぐ木の葉ちりて秋淋し

同廿八日 望村を[illegible]吉川左[illegible]

寿祝

老楽しき稀なる年の花盛

十一月六日 高木成元二祖百年忌

往ぬやいくとせ昔し適の霜

題六郎 新為舟の別に

霜かれと蒸子将めかんみの[illegible]

和田和解由信久 娘とえ[illegible]の祝

向うを[illegible]へせ[illegible]花

商人通交

つくはや速うれ高みねさうへ

十一月十九日 坂昌成当吟

風流しい[illegible]の[illegible]の舩渡

〇十一月廿二日 六條天神納 天満

月高し神の宿りし高瀬の句

日本紀の額あげて連歌

神や見る風も静まる高瀬松

冬月

紙きしむ絵馬にも額の月

奥

風寒さこれまさるらし春の雨

諸橋にて文を書く

おもひまや何かの和妻の縁を思て

おれ日にさみ庵問んとは

十一月晦日浮月楼にて

適ひや遊る流の吟　る

十二月三日神田大川行桃李宿

探題

冬川

風寒し吹かれ唄ふ川かな　和邦

同四日出句席

いつもの時雨いをやまさぬかな

かへすさへ砧の夜の帰かな

身につきいん寄いてなん

浮舟を通ておなな子の行

雅子おもひのさらるゝ秋

宿車身れはしみ通いの行

十千五句

花さいをさけかみ帰るに

ふとしの邦

冬混

松梅やあをのみまの冬さかり

性咲しく南北

さらにとらん身をわすれ

ぬくぬく涼む墨の袖

結はく人ゆゑ家の我

年ふれし間の旅の暮来て

門さわりとや立つるらん

大きひさしれ家の若の月

おかへいいのいとどとき

朦やく坐の文字業にて

春明まと年も帰す

ちへて云ふ花をおかかへ人なし

年門之春

年の門に乞ふ見たし春居

冬梅

春やまぬ梅の香誰も一宣垣

神忘るるや梅の冬の鏡

年の冬祝

織機のあかるく年や逢はとく

文化丁卯年

ゆく川に花をんせあさの妻

うすゆきに梅の香凍し高森の跡

源光翁元六十賀

幾年の花にくらぶ霜の松

二月十日浮月橋等客

兼題
春橋

山深し幾年も高端加る橋

同十一日船遊びにて

流るゝや花に嬉しき雨谷

同十八日[illegible]にて

風にそふてえや空たゝ家橋

湯島天満宮近所奉納連歌[illegible]

後々も同谷梅十題
探題
野梅

高由ちりし咲梅白き妻ぞの跡

二月廿二日年中天満宮へ詣て

香い神いかなる恵ぞ神の梅

同二十七日同所武蔵家の係に
於社奉納額之池田[illegible]是松庵
兼題
神祇月

行割や旅の上乃名月哉

同日里村喜頓家に

向ひ来る花の都の[illegible]乃道

[illegible]道の[illegible]柳

花乃路[illegible]の跡

さらしなに花さんせて高さの春
うすゝみ梅の香しのきゝは哉
遠見副元六十翁
咲年の花ハいくよ荷の松
二月十日浮月楼会席
兼題
春橋
山深し去年も高端加古橋
同十一日雑句ニ而　雪かわかれハ
流るゝや花を嬉しき雨台
日十八日従抗九布頭斎藤洲ニ而
風をつゝみや芽立たる霞橋

鶯鳴天満宮正遷宮奉納連歌会ニ
於長田谷梅十詠
探詠
野梅
高みにし咲梅白き春哉
二月九日年々天満宮へ詣て
春は神ぞいつる恵ぞ神の梅
同しく廿七日同本武多家カ傳に
法施奉納 頼之池田氏に於松居
兼詠
神秘月
所割や旅の上乃名月哉
同 明里村吉頭家前に
向ひ来る花の鞍の家乃道
咄嗟にも飛道の花かいしと柳
花乃旅かけき月明し乃哉

ちる句に
加賀
筆にはかりとまいし
手を枕にねむ枕の香
音信て唯聞こともなし
門を離る車の為遠へ
名はわれからいふきらん
妻戸ゆかさい離衣の香へ捨て

五月

高ね花地をさしと行くはなの郷

若葉

根を通子るや高なの綿若葉
摺いてはなとかうらん
橋綱しないと問へはとき言

かきらいて別れもなし
かくしぬ人まで夜はあけて
人の行に身をまかせし
老いは夜のいのちかくて

待宵

行人の夜に濡て夕もなし

菊月

花をし 翁 京や菊の月
南居
菊のことをゆく気かる宮
昨の風信れ来て畑かな
月の行末をいつと言ん
清力をへしきく わかの世

入ぬとはうき子ならさ
代りもみしかひをいはれん

春雨

深かて柳の雨も見えぬの色

春草

水越て石の高き根に哉

三月十日発句

旅に一ぬらし侍らをのこ
帰り来てはらんと云しことを

同

緑は守す柳をうしろさきて
若子とや摘はやかな
いはん

わきまへくの間もうつや

朝花

朝露の花かは匂ひ哉

夕花

夕顔や似る嘆きえの色
鳥居

夜のうちにすたみ哉
まくらの露の浮ていかん
誓ふをえでもれ侍さし
流しやうの柳のはつみ
人のつきの旅ゆかて
汲らしれむかし一流の宿
春の流いうて

ものの音を[illegible]本間山崎が部
志賀辺に枕して
君歌よみて寄らる事が部
二月九日松岡信之開咲
連歌懐紙のちらしぶみ
野居
うち向ふ軒のみ竹を野流
居られぬ夢と見し野斎宮
夕梅
たちすくむ山路のひとさし
わかすむ宿の梅の香ぞ　同某
餘寒月

夏の夜寒くも比叡の
ひまもなく咲く花の月　信之
山家嵐
山深く見る宿は松の戸に
いつも夜ねむらし　玄路
社頭祝
治まれる御代の松の色は連綿
いつも神も千代みかん　同信
四月七日斎宮浄瑠璃
橘のこぼれし[illegible]が部
同二日信之[illegible]
郭公やや聞き[illegible]涼之家

同十八日
恵光院ニ而二十七回忌
夜の月あかりし昔の夏も有
いつの日かあまた世の同僚
此間かりし おもふる寸哉
作りもし
ゝ

人よ知れ 蚊や帳 同じ寸
同廿一日 坂昌盛婦の子れい
雲きりや 一日ゝ晴れて 九日
わ月廿日 北河ゝ
若竹の青葉をはみし秋の風
同廿日 ゆめめんを

同十日 菖蒲婦ゝの殿
同十二日 鳥ゝゝ
あて虫を遠ざけゝの夕月夜
同廿日 坂月楼同吟
梅や何いゝし 秋の風
六月九日 信夫山ゝ吟
ゝやみ暮さて月のゝ
ゝ鵜や鵜飼 石の山
同十日 ゝ
ちくさ咲て たゝあいし ゝ
二疋ゝ かしと ゝ
ゝ ゝ つゝれ

ちすつゝしみの径ふさぎ

魂のうきたる子ゑらなりけり

硯の墨乃精や秋らし

若竹

若竹の一もとあかりのこしけり

扇

月ハ袖をもちこへし扇の郎

あつれて後を見いかにする

清暑の花をさぬむし弥生

涼しさの柳ひよと流

小車のおくれて遠き逢て

いそぎしらず 秋ハ来にけり

露の音露の身を吹きてみし

泉

涌わたる芽ハ岩間の音の郎

御撰

夜と秋の汐のおや七夕川

六月十二日 宣風坊用

人毎に風を持つ扇かな

四月十五日 以下留光院

標記

菱子乃露やこぼるゝの香し

道友扇子に竹頭とれ

きよきもの玉清水渡りの夜

宝暦六年小十帝 行弱石らよ

出やんかの牛なる 玉峯

白雲山妙義山江詣て

白雲に永く顔魚哉 也の乙

鉢のものに雲漂えて 風らの松

おりふしか望を 眺めつれ 大山